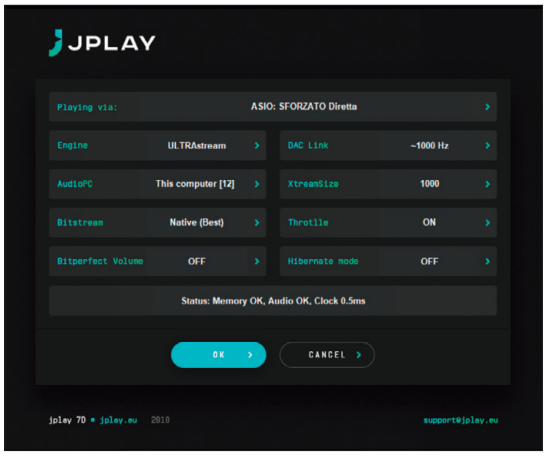
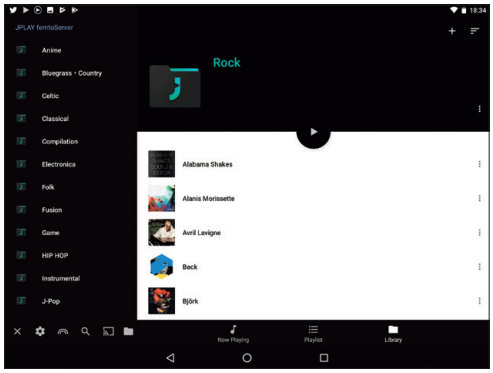
注目のソフトウェア最新動向

■JPLAYが音質と使いやすさに磨きをかけ「FEMTO」へと進化

機能は最小限に、あくまで音質を追求するという独自の路線で突き進む再生ソフトウェアJPLAYより、昨年新たに「JPLAY FEMTO」がリリースされた。主な新機能として、DSDのネイティブ再生に対応(Playing via：でASIO選択時)や、JPLAYの実力を発揮するうえで重要となる「DAC Link」の最大周波数は1000Hzまで設定可能となったことが挙げられる。また注目すべき点が、従来のJPLAYSteamerがOpenHome対応だったのに対し、JPLAY FEMTOはDLNA対応へと回帰したこと。利便性からは後退ともとれる仕様変更だが、それでも音の良さを追求したいというJPLAYの姿勢がうかがえる決断と言える。ただ一方では、専用UPnPサーバー「femtoServer」の実装により、別途サーバーソフトを実装する必要がなくなったことやコントロールアプリの中でも最高峰の操作性の高さを持つ「fidata Music app」へ対応したことで、より一層の使い勝手の良さも実現。音質と使いやすさに磨きのかかった、正統進化と言えるだろう。

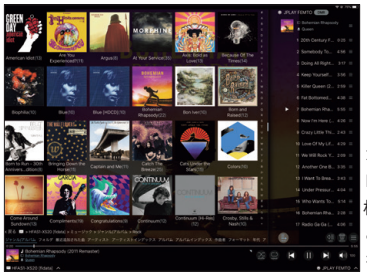


JPLAY FEMTOの設定画面。従来のものとデザインは大きくは異ならない。「Playing via：」をクリックでドライバーを選択できる。「DAC Link」は今回から1000Hzまで設定可能



Androidのコントロールアプリ「BubbleUPnP」を使い、純正サーバーである「femtoServer」の音源をブラウズしている様子

以前と比べ使い勝手の良さは向上しているとはいえ、導入にはそれなりのハードルが要求される。21日間の試用版が用意されているので、まずここでじっくりと吟味した上で購入を検討しよう



左の画像はiOS/Android両対応のコントロールアプリ「fidata Music App」と組み合わせてJPLAY FEMTOを使用している様子。JPLAY FEMTOと組み合わせるオーディオ用サーバーとしては、アイ・オー・データのfidataとSoundgenicが対応を果たしている

前述のとおり純正アプリとJPLAY FEMTOは相性が良く、PC本体のストレージ容量を気にする必要がなくなるなど、導入のメリットは少なくない。

DACの力を最大限引き出す頭抜けた音の良さが特徴

JPLAY FEMTOの最大の特徴、それはずばり「音の良さ」である。機能を増やすよりも利便性を高めるよりも、なによりも音質を優先するJPLAYの開発姿勢は、他の再生ソフトを凌駕する再生品質として結実している。ちなみに筆者は現在、USB DACを自宅でテストする際、可能な限りJPLAY FEMTOを使って聴くようにしている。「組み合わせるUSB DACの実力を最大限に引き出す」という点で、JPLAY FEMTOは頭ひとつ抜けていると感じるからだ。

多様な設定項目が用意され、好みに応じて深い音質追求が可能なこともまた、JPLAY FEMTOの大きな特徴である。しかし、それは「設定が困難」あるいは「追求しないといい音が出ない」ということを意味するものではない。安定した再生を行うためのハードルが他の再生ソフトと比べて著しく高いということはなく、最低限必要な設定を行うだけでも、JPLAY FEMTOの実力はしっかりと感じられる。

なお、JPLAY FEMTOは以前のバージョンに比べると、「DAC Link」を高く設定した時の安定性が大きく向上している。また、「Playing：via」でASIOを選択した場合でもDACLinkの設定が有効になり、いままで以上に柔軟な運用が可能となった。

音質追求を奥深く手軽に始めさせてくれる

昨今の再生ソフトの流れを見ると、「Roon」が端的に示すように、音質を担保したうえで「より多機能に、より便利に、より快適に」という方向性が主流になっていることは間違いない。筆者としても、その流れはおおいに歓迎したいところだ。一方で、使い勝手を犠牲にしてでも音質を追求するという方向性があってもいい。まさにそのような要求に応え得る奥深さと、PC一台でも高品位な再生音が得られる手軽さを兼ね備えていることが、JPLAY FEMTOの魅力なのだと言える。